

## 家政学への思い

横浜国立大学名誉教授 大矢 勝

### はじめに

平成二年に横浜国立大学教育学部に採用して頂き、その後所属部局等の異動もありましたが、この三月で三十三年間の勤務を無事終えて定年退職を迎えることができました。皆様のおかげであると感謝するとともに、この度ときわ会から原稿執筆をご依頼頂きまして、私にとっては何れもたい機会ととらえて家政学への思いをまとめさせて頂きます。

### 1. 生活科学部に進学した理由

私の家政学への思いを語るうえで欠かせないのが、大学進学時に生活科学部という家政学系の学部に進学したことです。大阪市立大学生活科学部被服学科で、生活科学部という名称は私が入学する少し前に家政学部から変わったものです。なぜ私が生活科学部に進学したかという点、受験に失敗して二浪し、それまでと違った価値観を持つようになったからです。

実は現役時代は教育学部の数学科を受験しました。数学科に関心があったわけではなく、将来高校の教員になってバスケットボール部の顧問になつて全国大会制覇したいといった夢を持っていたのです。数学科を希望したのは、予習しなくても教えられる教科なので、バスケットボールの指導に熱中できると考えていたからです。実際の教員の方々からはこつぴどく叱られそうです。

なぜか受かっているに違いないと思い込んで合格発表に行き、落ちたことに真つ青になり、一緒に発表を見に行った女子学生がせっかく受かっているのに喜べない状況にしてみました。

一浪して今度は理学部か文学部などはどうかと考えていましたが、最後は経済学部に行つて楽しく過ごして大学教員にでもなろうかと受験したところ、案の定落ちました。そのような甘い考えで人生やっていたわけがありませんから、当然ですね。

二浪になつてからは反省の日々です。自宅にいては家を暗くするからと、家を出て一人ボロアパート住まいで浪人生活です。大学はあきらめようかとも考え、専門学校に行くために喫茶店のアルバイトに応募しましたが断られ、社会の最底辺の存在になつたと惨めな思いになりました。そんな時にあまり仲が良くなかった父から「お前は今まで受験勉強しかしてこなかった。急に社会人は無理。〇〇大学でもいいから行け」と、当時最低レベルと評判の〇〇大学でもいいじゃないかと言われました。実は父は家庭の事情で尋常高等小学校を出てすぐ働き始め、大学に対してかなりコンプレックスを抱いており、「東大、阪大、九大は良くてそれ以外は全部だめだ」という意味不明の発言をしていました。それは、勤めていた会社ではそれらの大学出身者が幹部であったのかもしれませんが。その父の言動の変化をきっかけに私の考え方が変わってきました。

大学の格というよりは、私のような者でも必要としてくれるところがあれば、どこでもいいと。日本全国の大学を調べ、博士課程を有しており、研究者になりたい人はどうぞいらつしやいと募集しているところがあります。そして最終的に三つの候補が残りました。北海道大学水産学部、徳島大学医学部栄養学科、大阪市立大学生活科学部被服学科の三つです。当時既に大学教員への道は狭き門と言われていましたが、今でもこの三大学がお買い得だとの判断は正しかったと思っています。親にも心配をかけたこともあり、結果的に実家に近い大阪市立大学を選ぶことになりました。

被服学科に進学しましたが、当時の中学・高校は女子が被服実習をしている間に男子は技術科や体育の授業を受けていました。一学年二十名ほどの学科ですが、男子は一学年に一人いるかないかで、男子学生の

ハンディは大変なものでした。しかし、温かく指導していただき乗り切ることができました。作製したワイシャツは首回りサイズが全く合わず、そのまま廃棄処分になってしまいました。

私が教員になってから大学入試の面接試験等で、好きな科目と志望学科の関係などを聞く場面があるのですが、私からすると「甘い」と感じてしまいます。私の場合はどんな分野でも好きになれる自信があるからです。食べ物の好みを色々と論じている場面をみて、飢えて生命に危機が及んだ経験のある人からすれば、「何を甘いこと言ってるんですか？食べられればなんでも有難いでしょう」ということになりますから。

## 2. 横浜国立大学に採用される

一九八二年に大阪市立大学生活科学部を卒業後、大阪市立大学大学院生活科学研究科（修士課程）に進学しました。皆川基教授のもと、「泡洗浄」というテーマを与えて頂き、研究に励みました。博士課程に進みかけたのですが、修士課程修了後に短期大学の講師採用のお声掛けを頂き、当時婚約もしていたので教授からは就職を進められました。そして短期大学で勤務しながら、もぐりの社会人ドクター院生のような形で、学部生指導も担当させて頂いて大阪市立大学で研究を続けさせていただきました。

その短期大学は四年制大学への昇格を目指して、私と同期に研究に熱心な若手が六名ほど採用されたのですが、四年制への移行のハードルが予想以上に高いことが発覚して諦めることになり、研究を続けたい者は援助するから研究のできる大学を探すようにとのお達しがありました。結果的に集まった若手の大部分は一九九〇年から数年間で他大学に移ることになりました。

私の場合は大阪市大のボスに相談して対応策を考えました。国立大学の教育学部の家庭科被服学担当が狙い目になり、関西中部にある大学が距離的にもよいということでボスに相談したところ、研究室内にもそ

の大学を狙っている先輩もおり、あまりお勧めしないとのことでした。その時にボスから横浜国立大学の話が出ました。当時は国立大学教員の名簿が図書館で閲覧でき、横浜国立大学の家政学教室は、お茶の水女子大、東大、東工大ご出身の先生方で占められているような状態で、ここに突撃するのは玉砕戦法だということで躊躇しました。当時、研究室の先輩で国立大の教育学部にお勤めの先輩からは、お茶大と奈良女が均衡を保っているところが狙いどころで、どちらかが強いところは大阪市大にとって厳しいとの助言を頂いていました。しかし、ボスからは「大矢君は神戸出身だし横浜は似合うよ。君には関東が向いているよ」との意味不明な説得があり、横浜国大にチャレンジすることとなりました。

精一杯採用されるべく努力はしましたが、この機会を逃したら数年後に九州地区かと、実は諦めムードになっていました。そんな中、突然お電話で採用候補者になったとお聞きしまして、妻と大喜びしたことを覚えています。それまで、関西以外の地区に決まった場合には単身赴任が前提と言っていた妻ですが、横浜国大なら家族で引っ越すのが当然だと態度が一変しました。

## 3. 教育学部の印象

一九九〇年に教育学部に採用され、今までの人脈と一切関係のないような環境下に置かれましたが、家政学教室の先生方に大変親切に接して頂きました。特にお隣の研究室の原田睦夫先生には大変お世話になりました。お酒がお好きで、学内外での教育学部内の先生方とのお付き合いにお供させて頂き、私にとって過ごしやすい環境をご提供いただきました。当時の鶴見学部長、原田先生、そして私の三人で飲む機会なども結構記憶に残っておりまして、今から考えるとどんなでもなく贅沢な機会を与えて頂いたものと、感謝に堪えないと思います。

当時の大学は「自由」を謳歌するアカデミックな雰囲気は満ち溢れ、その中でも横浜国立大学の教育学部は、文学系、社会学系、理学系、芸術系、

体育系等の先生方が寄り集まって好きなことを言い合いながら全体としてまとまっており、本当に「大学」そのものだと感じました。学校教育も重視しながら、文学部や理学部のような研究も重視する姿勢が特徴的でした。ただ、専門分野では日本を代表する著名な研究者でありながら、授業の半分以上は休講にしようといった先生や、学部長には強権的だと食い下がりながらご自身はハラスメントの塊？のような先生もおられるという話もお聞きしたことがあり、義務と自由さとのバランスの課題もあるのだと感じていました。

家政学教室はその教育学部の中でしつかりとした地位を保っており、かなり尊重されている印象を受けました。私は被服学の中の被服材料学・被服管理学の担当でしたが、関連する研究や教育、社会活動等を自由に繰り広げられる、快適な環境に胸を躍らせていました。

#### 4. 学校教育の先生方と接して

学校教育に関わる組織ですので、ときわ会の会員の方々をはじめ、学校教育に携わっておられる先生方と接触する機会を持つました。その中で、私のその後の方向性に深く影響を与えることがありました。

私の研究分野は主として洗浄に関するもので、特に汚れを落とすための洗剤組成等については程々の知識を有していると自負していました。しかし、実際の家庭科教育の現場の先生方からは「石けん使用を推進する授業を進めたいが、その工夫を助言してほしい」といった要望が大部分でした。これは、私の独自の路線を進んでいくきっかけとなりました。

最近の比較的若い方々は「ご存じない場合が多いですが、一九九〇年代以前は、合成洗剤は人体や環境に有害なので石けんの使用を推進すべきとする石けん運動が盛んでした。それまで私が活動してきた学会は合成洗剤メーカーの方々も多く参加しており、石けん運動は非科学的で一部の運動家がタッチしているだけだと聞いていました。ところが排水浄化センターの専門員の方や理科教育の先生方も石けん使用を推進すべきと

いう先生方が多く、社会科の先生方は「合成洗剤はあり得ない！」という態度でした。そして教育実習への訪問時に理解したのですが、小中高等学校では石けん運動推進というスタンスがデフォルトでした。それでも「ひよっとすると学会等で私はバイアスのかかった情報を受け入れてきたのか？」という疑問を抱くようになりました。

それで始めたのが「洗剤問題をめぐる生活情報の分析」という研究です。一般消費者向けの著作を中心に洗剤問題に関する情報を収集・整理し、一方で専門家の発した安全性等に関する元情報にアクセスし、安全性や環境影響等に関する情報の正誤や流通過程での問題点等について研究を進めました。学会の参加履歴をみると、数年間は洗剤メーカーの方々が参加している学会と距離をおいていたこともわかりました。品川駅の国民生活センターに通って資料をコピーし、中古書店で書籍を収集したりして、関連情報の収集量では日本一だと自認するまでになりました。

その調査の結果、合成洗剤有害説は「火のない所に煙をたたせたもの」であると判断するに至りました。何一つとして合成洗剤を排除すべき根拠となる情報は見当たらなかったのです。それで、この誤情報に何とか対応せねばならないと思い、それまでの洗浄科学の研究から消費者情報の分野へ舵を切ることとなりました。洗剤メーカーの人たちがいくら主張しても説得力がありません。では、誰がその問題に対応すべきかと考えると大学教員しかおりません。この問題を見逃さずなら、洗剤関係の研究をしている生活科学者としての存在意義が問われると思いました。

その手始めに大学主催の公開講座を単独で企画し、一般消費者の方に合成洗剤有害説は科学的に間違っていることを説明しようと試みました。しかし、これは見事に失敗しました。受講者には洗剤メーカーの広報員であるかのような印象を与え、評価も散々なものでした。一人の受講生からの発言が特に印象に残りました。洗剤は発がん物質だといった非科学的な内容の書籍を手に掲げて「私はあなたのことは今日まで知らなかった。でもこの本の著者はよく知っている。私はあなたよりもこの本の

著者を信じる」と。

これは私にとつては衝撃的でした。博士号を有した横浜国立大学の助教授といえ、社会的な信頼性は十分だと思つていたのですが、実際の発言力は怪しげな書籍の著者にも劣つてゐるのだと思ひ知らされました。以降、社会に向けて情報を発信したいのならば、一般向けの知名度を上げる必要があることを悟りました。以降、テレビ番組出演や一般向け書籍の執筆に力を入れるようになったのです。

## 5. 輸出教員になつて

一九九七年十月に教育学部が改組されて教育人間科学部が設置されました。それまで家政学教室は学校教育課程の家庭科とゼロ免課程と呼ばれる4つの課程の中のひとつ、生涯教育課程の生活教育コースを担当していましたが、学校教育課程とそれ以外とを完全に分離するという方向での改組となりました。その際、生涯教育課程は消失する方向で進められることになり、個人的には困つた状況に陥りました。学校教育系とそれ以外の担当教員を完全に切り分けるのですが、家政学教室メンバーが全員学校教育課程に残るといふのは厳しい状況で、特に学校教育で欠かせない被服構成学を担当してゐない被服学担当の私は学校教育系に残るのが極めて難しい状況でした。

学校教育課程以外では地球環境課程(理科メンバー)、マルチメディア文化課程(芸術+数学メンバー)、国際共生社会課程(文系・社会系・その他メンバー)という振り分けでしたが、私の場合どの課程に入つてもやつていけるだろうから人数合わせ要因に…、という流れになつてしましました。危機感に押されて、自分から積極的に地球環境課程の担当になる意思を表明することになりました。この言動は、結果的には自ら好んで家政学教室を飛び出して理科学分野にシフトする振つたような、いわば家政学教室を裏切るような形になつてしまい、大きな後ろめたさを感じることとなりました。ただ、自分自身としては家政学系分野からの他分

野への輸出教員として家政学系分野の発展に尽くしていこうと決心しました。

地球環境課程の完成年次に設置された大学院環境情報研究院・学府も兼担し、二〇一一年には地球環境課程が廃止されて、所属が大学院環境情報研究院・学府となり、学部も理工学部の化学系生命系学科を担当することになりました。こうして、家政系の出身者が外観からは理工系の教員に転身した訳です。

地球環境課程の担当時は、洗剤の環境影響についての実験研究に力を入れました。合成洗剤・石けんをめぐる論争に加わつて色々意見述べたりもしていましたが、実験できる部分は自身で研究を行いたいと思つていたので、ミジンコを飼つて毒性試験をしたり、下水汚泥の細菌を使つて洗剤成分の生分解性試験をしたりと、色々研究を重ねて論文にまとめました。

実は、これらの研究も興味や関心からというよりは、環境関連の研究として通用するという裏付けが欲しかつたからです。洗剤、石けん等の良し悪しを論じる場合、商売等に関連して明確な利害関係者が存在するので、「研究者でもないくせに…」といった発言で攻撃してくる人もいます。ほかに、「洗剤会社のお抱え学者」といったマーケティングに対抗する意味合いもあつて、テレビ番組等で重曹やクエン酸などの賢い使い方等も守備範囲として扱うことにしていました。洗剤問題をめぐる消費者情報の分野での綱引きの一環としての意味合いが強かつたのです。

理工学部担当に変わった後は、環境系から洗浄科学の研究にシフトしてきました。洗剤論争はほぼ静まり、生活科学を題材として化学の面白さを伝える活動に興味を覚えたからです。洗浄科学といつても、米のどぎ汁、麵のゆで汁、クエン酸の効果、カレーやワインのしみ抜きなど、家政学本流の研究といつてもよいテーマにも楽しく取り組ませてもらいました。番組等で適当なことを発言してしまい、本当はどうなんだろうかという疑問が出発点になつたテーマも多く含まれていました。

## 6. 家政学の本質とは？

家政学系からの輸出型教員としての経験から家政学と理工学との間で大きな違いがあることを知りました。理工学系は細かく深く進んでいくことが基本になります。化学の中の物理化学の界面化学の乳化学の充填化構造理論の、ある特殊な条件での分子挙動は・・・というように、深く深く掘り下げて研究テーマを設定するというのが基本姿勢になります。一方で家政学では実際の社会的問題が発点になって、その問題解決のためのテーマを組んでいくというのが基本姿勢になります。

研究のしやすさや論文の作成しやすさでは理工系の一般的な研究が圧倒的に有利です。言い方は悪いですが、研究のフォーマットがあつて、そこに従来とは異なる物質や新しい測定機器を用いてデータを出すなど、少し機械的な作業で成立する研究です。個人的にはあまり興味を惹かれませんが、一方で家政学系の研究は問題意識が先走り、目的と結論の次元が異なる、エビデンス不足、論理性の欠落など、テーマには興味を惹かれますが論文としての内容に仕上がっていないという研究発表が多いように思います。また家政学系組織の主催する講演会等でも、社会問題に即したテーマが設定されることが多いのですが、演者は他分野の方々ばかりであり、学術分野としての家政学の意味合いが問われる場面も多かったように思われます。

しかし、理工系を含めて日本の科学技術は深刻な状況です。第二次世界大戦後、焼け野原の日本では設備も材料も何もない状況で工夫して様々な研究が行われました。性格的には問題があつても独創的な思考ができる名物教授が活躍して種々の研究が進展しました。しかし、そのパイオニアの弟子の世代には、パイオニアの考えを具現化するための緻密さや論文作成のチェック能力などが求められ、細部ばかりにうるさく独創性に欠ける研究者が育ってしまい、大学は研究機関としては魅力のない場所に成り下がってしまいました。アイデアよりも高度な研究設備に頼る方向に進んでしまったことも災いし、財力面で中国等に優位性を奪

われた後は見るも無残な状況です。また研究費の減少や大学の管理体制の強化などが、その魅力低減に拍車をかけました。

科学技術立国としての再生には、実はもう日本は手遅れの状況になっているのかもしれない。今後は論文を出すとか特許で儲けるなどの科学から、お金を使わなくても暮らしやすい環境を整えて幸福感を高めるような工夫で、地域として差別化を図るための実践的科学研究が求められるのではないのでしょうか？それが今後求められる家政学の姿だと私は考えています。

### おわりに

常勤の大学教員としては一区切りとなりました。今後は放送大学神奈川学習センターで客員教授を務めさせて頂くとともに、あと数年は非常勤扱いで博士課程院生をサポートする予定です。また個人的活動としては大学外に「洗浄科学研究室」を開設するとともに、いくつかの企業の技術顧問を担当し、一般向けには生活科学の面白さを広める情報発信を行っていきたくと考えています。

少子化の影響等で大学の家政学分野は厳しい状況にあります。そのポテンシャルや社会的な重要性は決して色あせるものではないと考えています。これまでの家政学の資源を活用して新たな展開に結び付けられるよう、微力ながら私なりに取り組んでいきたいと思っています。家政学への思いを共有するときわ会の皆様と、今後も何らかの活動で一緒にできる機会があればありがたいと思っています。最後に、これまでの温かいお付き合いに対して感謝申し上げます。

